

コンセイサオン・エヴァリストの文学

——「エスクレヴィヴェンシア」と『ポンシア・ヴィセンシオ』——

武田千香

はじめに

近年、ブラジルの文学界ではアフリカにルーツを持つ作家（以下「アフロブラジル作家」）への注目度が高まっており、2020年から3年間続けてブラジルで最高の文学賞といわれるジャブチ賞をアフロブラジル作家が受賞している¹。

コンセイサオン・エヴァリスト (Conceição Evaristo, 1946～) は、ブラジルの黒人、とりわけ黒人女性の地位向上と差別撤廃を訴える「抵抗のシンボル」(JESUS et al. 2018)ともされる作家にして詩人であり、アフロブラジル作家の躍進を牽引してきたパイオニア的存在である。執筆活動は1990年、雑誌『黒人ノート (Cadernos Negros)』への詩や短編の投稿に始まり、2003年に、本論で扱う最初の長編小説『ポンシア・ヴィセンシオ (Ponciá Vicêncio)』を出版した。この作品は高い評価を得て、いまではアフロブラジル文学の古典的存在にもなっている。続いて『記憶の路地 (Becos da memória)』(2006)、『思い出とそのほかの動き (Recordações e outros movimentos)』(2008)、『女性たちの不屈の涙 (Insubmissas lágrimas de mulheres)』(2011)、『水の眼 (Olhos d'Água)』(2014)を発表し、『水の眼』はジャブチ賞(短編・クロニカ部門)の3位を獲得した²。『軽い過ちと類似の物語 (Histórias de leves enganos e parencças)』が出版された2016年頃からエヴァリストの評価は一気に高まり、以降さまざまな文学イベントに参加し、数々の文学賞を受賞して³、いまやアフロブラジル文学に限らずブラジル現代文学を代表する作家になっている。

エヴァリストは、自らの著述スタイルに、実体験に目を向けた書き物という意味で「エスクレヴィヴェンシア (escrevivência)」と命名している。最初にこの言葉を用いたのは1994年、修士論文を執筆していたときで、動詞 *escrever* (書く) と名詞 *vivência* (生きること) を合成して作ったという (EVARISTO 2018a: 5)。といってもこれは単に作家個人の生きざまを描くことではない。アフリカにルーツを持つ人々すべての過去の経験を語り、それを集団的記憶にまで高めることがめざされている。

本論では、その独自の作風である「エスクレヴィヴェンシア」がどのようなものかを、本人のインタビューをもとに明確にし、それがどのように実践されているかを、代表作『ポンシア・ヴィセンシオ』で検証する。

1. コンセイサオン・エヴァリスト



エスクレヴィヴェンシアが「生きること」を「書くこと」である以上、作家本人の生きざまを知ることは重要である。まずはエヴァリストの生い立ちをおさえておきたい。

1. 1. ファヴェーラから文壇へ⁴

エヴァリストは1946年、ミナスジェライス州ベロオリゾンチ市のペンドウーラ・サイアというファヴェーラ（貧民街）で生まれた。9人兄弟で、そのうちエヴァリストを含む4人は母親と先夫のあいだに生まれた子で、残り5人は2番目の夫との子でエヴァリストにとっては異父兄弟にあたる。実父のことはほとんど知らないという。暮らしは困窮を極め、エヴァリストは食糧がなくて泣く母の姿を覚えている（EVARISTO 2014: 103）。食い扶持を減らすため7歳のときに、子のいないお婆の家に移り住んだが、そこは実家より経済的余裕があったため、ほかの兄弟より勉強の機会が得られたことがエヴァリストに幸いした。母とお婆は、洗濯や料理や掃除やアイロンかけ等の家事を請け負い、エヴァリスト自身も近所の子どもの世話をして小銭を稼いだり、母親が働く家に洗濯物の回収との手伝いをしたりし、8歳のときから自分もメイドとして働いたり、ゴミの収集をしたりした。

母親は教育意識が高く、エヴァリストを近隣の学校よりもレベルの高い、ベロオリゾンチの上流階級が通う公立学校に通わせた。母親は当時話題になったファヴェーラ出身の作家マリア・カロリーナ・ジ・ジェズス（Maria Carolina de Jesus）の『カロリーナの日記（*Quarto de despejo*）』⁵を読んで感化され、自らも日記をつけていた。エヴァリストは小学校で、貧しい出自の黒人という境遇を痛いほどに意識することになる。2階建ての校舎は、上階が成績優秀者等⁶の教室に割り当てられ、貧しい子どもの教室には「半地下」が宛がわれた。まるで「奴隷船の半地下」で、地理的「学校版アパルトヘイト」だったと、エヴァリストは回想する。カトリック教育を強制され、天使が白人で金髪であることにも常に違和感を抱いた。

そうした物理的な隔たりを学力で克服し、4年生のときエヴァリストは晴れて上階へ移ることが許された。ところがそのことが一部の教員の反発を買い、さらには日頃から教員を質問攻めにしたり、学校行事への参加を強く求めたりしていたことから問題児扱いも受けた。1958年、卒業時の作文コンクールで入賞し、レベルの高さは教員のだれにも異論はなかったが、賞の授与については意見が割れたという。母親も黙ることなく保護者会ではなにかにつけ物申したようである。「黒人の貧しい女の子には、家族も含め、相応の受け身が姿勢に期待された。だが私たちはそうではなかった。私たちは、漠然とながらも、ファヴェーラに住む貧しい黒人の境遇に対して意識的だった」と語っている。

そこには母方のおじのオズヴァルジ・カタリーノ・エヴァリストの影響があった。彼は、第二次世界大戦時にはイタリアへ出征し、復員後はベロオリゾンチで教育局に勤務し、詩作や絵画を嗜んでいた。ブラジルの黒人の境遇に大いに意識的で、エヴァリストは、黒人という意識はおじから最初に教わったと言い、おじから聞いた忘れられない言葉として、人類は人間を奴隷化するために祖国、家族、宗教という3つの境遇を発明し、そのためなら人はどんな野蛮なこともできるというものを挙げている（EVARISTO 2021a）。黒人が常

に富裕な白人の下位に置かれることがエヴァリストには理不尽に思えた。たとえば母親がメイドとして働く家で、その同年代の娘が自分の母親を名前で呼ぶのに、なぜ自分はその娘の母親を「奥様 (a senhora)」と呼ばなくてはならないのかが不思議だった (EVARISTO 2021a)。強く生きる姿勢は周囲にいた女性たちから学んだとも述べている (EVARISTO 2018c)。

その後、中学校へ進学し、たびたび中断し、17歳のときに「カトリック青年労働者連盟」に参加しはじめ、この頃から社会正義を積極的に追求するようになった。だが、このときはまだ労働問題としてしか捉えておらず、人種という視点がそこに入ったのは、70年代にリオデジャネイロに移り住んでからだ。

1.2. リオデジャネイロへ、そしてアカデミアへ⁷

エヴァリストは教師をめざして師範学校に入学し、71年に卒業したが、ベロオリゾンチで教職に就くことはできなかった。就職には有力者の推薦が必要だったが、一家にはそうした人脈がなかったのだ。その頃、オウロ・プレットで開催されたイベントでリオの教員と知り合い、またリオで音楽活動をしていた青年とつき合いはじめたことから、彼らを頼ってリオに上京する。この背後には、住んでいたファヴェーラから立ち退きを強要された事情もあった (EVARISTO 2014: 107)。73年、リオデジャネイロの教員試験に合格し、ついに教職に就く。76年にはリオデジャネイロ連邦大学文学部に入学したが、そこでも待っていたのは人種差別だった。同級生とは問題がなかったが、一部の教授は黒人学生を受け容れる姿勢に欠け、差別を受けたという。その差別を、「特定の場所で口では表わさないが、白人の目が黒人の目を突き抜けるというブラジルの典型的な行動だった」 (EVARISTO 2018d) と表現している。

ブラジルでは1970年代後半から黒人運動が盛んになり、リオでも黒人文化研究所 (Instituto das Pesquisas das Culturas Negras-IPCN) が設立され、エヴァリストはレリア・ゴンザレスなど運動の中心人物らと知り合う。1981年に結婚し、生まれた娘に障害があったため1987年ぐらいまで活動とは距離ができたが、可能な範囲で参加し続けた。1988年の奴隷制廃止100周年の抗議運動には夫とともに娘を負ぶって参加したという。1992年、リオデジャネイロ・カトリック大学大学院に進学し、1996年に修士論文「黒人文学：我々のアフロブラジル性の詩学 (Literatura Negra: Uma Poética da Nossa Afro-Brasilidade)」で修士号を取り、2011年にはフルミネンセ連邦大学大学院で博士論文「同舟の詩：兄弟の歌 (Poemas Malungos: cânticos irmãos)」により博士号を取得した。65歳のときである (literafro)。そしてようやくブラジルの文学界で注目される作家となったのが2016年頃、すでに71歳になっていた。

2. エスクレヴィヴェンシア

このような生い立ちを持つエヴァリストが自らの文学の作風に命名した「エスクレヴィヴェンシア」とはどのようなものなのだろうか。ここからは、本人のインタビュー等からそれを探っていこう。

2. 1. エスクレヴィヴェンシアの原点

エヴァリストの目の前に書かれた物として現われた最初の「グラフィックサイン」(EVARISTO 2005)は、母親が小枝で地面に描いた太陽だったという。それは、富裕な家から洗濯を請け負う母親が、長雨が続きと服が乾かないため、好天を切に願い、暮らしに太陽を呼び込むために描いた絵だった。自分たちではなく他人の服を乾かすため、指先ではなく全身全霊を注いで絵を描く母親のその姿に、エヴァリストは「書くことの役目、切迫性、傷み、必要性、希望を発見した。書かれた物を生活に、あるいはその逆に結びつける必要があることを発見した」という (EVARISTO 2005)。書くことは、母親やおばが、白シャツ4枚、バスタオル4枚、パンティ15枚…と洗濯物を照合するときには有用だったが、ときには頭痛の種になることも子どもながらに感じ取っていた。洗濯やアイロンがけをするときには自信に満ちている手が、女主人の視線の前で洗濯物をチェックするときには、紛失や間違いを恐れて震えだす光景を目の当たりにしていたからだ。また血痕のついた下着を平気で洗わせる富裕層の白人女性にも不可解さを拭えなかった。そんな現実の中で、文字を覚えたり宿題をしたり、ごみ収集で拾った雑誌を読んだりするとき、そしておばに倣って日々の重要な出来事を書き留めはじめたとき、常に自分を導いてくれたのが「太陽を地面に描き、女たちの下着の血痕をごしごし洗う洗濯女の手」だったと述懐している (EVARISTO 2005)。アフリカでは、通常われわれが用いるような文字ではなく、図形や文様や絵画などの芸術表現が盛んに行われてきた (江口 1985: 73)。図形の記憶がエヴァリストの文学の原点となっていることはたいへん興味深い。

家に本はなかったが、おばが図書館で働きはじめたため公立図書館に自由に出入りできるようになった頃から読書の習慣が身に着き (EVARISTO 2005)、その後も本には高校の図書館やおじの家でも親しんだ。新聞や雑誌を読む習慣はすでに母とおばにもあったという (EVARISTO 2014: 104)。書くことについては、学校の作文の授業がその意味を悟る重要な経験となった。そこでは「おじの農場での散策」や「私のお誕生日会」などエヴァリストの日常とは縁のないテーマが出されたため、想像で話を創るしかなかったのだ (DUARTE/NUNES 2020: 33)。こうして書くことは二つの意味を帯びていく (EVARISTO 2005)。現実を脱出して夢を見るための手段と、現実を変革するための手段としての意味である。書くことは、おじの詩作にも感化されたようだ (EVARISTO 2014: 104)。そして読むことは「世界を耐える手段」となっていった。読むことと書くことについて、エヴァリストは次のように述べている。

(…) 読むことが世界を把握する機会を与えてくれるとすれば、書くことは生の知覚の限界を超越します。書くことは、書かれた物の主体自身のダイナミズムを前提とする

ため、自ずから世界の内側に自己を書き込む機会を与えます。これを黒人女性が行うと、彼女たちは歴史的にエリートの文化に占有されている場所とは異なる文化的空間を歩んできただけに、書くことに不服従の意味が備わります。この不服従は多くの場合、(…)言語の「高尚な規範」を冒す書き方に表われ、また語られる素材の選択にも表われます。(EVARISTO 2005)

エヴァリストにとって書くことは、単に世界の在り方を書き留めることではなく、不服従を支点として“教養”ある白人が築いてきた文学言語に挑戦する創造的な行為でもある。こうしてエヴァリストは、書く行為に「自分の特殊性、すなわち女性であり黒人である主体としての特異性を自己肯定する場を与える意識」を付与していくことになる (EVARISTO 2005)。

2. 2. 黒人女性のエピソード

エスクレヴィヴェンシアは、アフリカにルーツを持つブラジルの黒人の生きざまを扱うが、従来のブラジル文学に黒人が登場してこなかったわけではない。だが、それらは白人が客体として描いたもので、エスクレヴィヴェンシアでは黒人、とりわけ人種、ジェンダー、クラスのすべてにおいて虐げられている黒人女性が主体的に当事者の視線から描くことをめざす。エヴァリストは、この例としてメイドを登場人物にする場合を挙げる。実際にメイドを経験したことの無い作家が書くと、戸口に立って部屋の中にいるメイドを見て書くことになり、どれだけ素晴らしい文章で書いても、外からの視線を免れることはできない。だが、「そのような先祖の歴史、すなわち身を以てその被従属性を経験した女性たちを先達として持つ私たちなら、まるで自分が部屋の中にいるかのように」、どれだけ彼女たちが劣位に置かれ、残酷な仕打ちに遭ってきたかを「中から」語る (EVARISTO 2018a: 9)。エヴァリストは、「“中から”出てくる話の力」、「経験の“中から”発話される私の声」を信じる (EVARISTO 2015)。中からの声には、「外の者がどれだけ知的かつ情感的に優れた視点から書いても持たせることのできない重みがある。(…)これは文学の質の善し悪しではない。(…)言説がどこで生まれ、展開されるかの問題」 (EVARISTO 2018c) なのだ。男性が女性について書いていけないわけでも、白人が黒人について書いていけないわけでもないが、書かれた物が「私たち〔黒人女性-筆者補足〕の主体性を背負う」とき、言葉は「異なる社会的な場、ジェンダーの場、人種の場から繰り出され」、そこに「明確な特徴」が備わる。(EVARISTO 2018c)「黒人女性であるため、女性であるため、民衆であるため禁止を被り続けてきた者として、私はどんな機会も逃さず〔被抑圧者に加えられる暴力について-筆者補足〕黙ることはせず、そうしたくもない。こうした体験の「中」から繰り出される私の声には異なる語調が備わると信じている。ここには知的理解を超越する何かがある」 (EVARISTO 2015) と言う。

奴隷としてアフリカからアメリカ大陸に連れてこられた人々の子孫である黒人 (女性) の主体性を書かれた物が背負うとき、それを形づくる知的枠組みは自ずから、その人々の

宗教や思想や文化になり、従来のヨーロッパの文学のものとは異なってくる。エヴァリストはそれを「エピステーマー」という言葉で表現しており (EVARISTO 2018a: 9-10)、それがエスクレヴィヴェンシアの基盤である。

2.3. 口頭伝承性

エヴァリストが「私のテキストの影響はすべて口頭伝承から来ている」(JESUS et al. 2018) と述べていることからわかるように、口頭伝承性はその文学の重要な特徴で、知的枠組みにも大きく関わっている。

とくにエヴァリストの場合、女性たちに囲まれて育ったことが大きく影響したらしい。ゆりかごにいたときから物語を聞いたり語ったりするのが得意だったといい、自宅や近所で語られていた「ひそひそ話、夜話、秘密、子どもは聞いてはいけない話も、目を閉じて寝たふりをしつつ、全感覚を覚醒させて聞き、言葉、音、囁き、話の筋次第で愉しみと苦悩で途切れる声を全身で受け止めた」。男性優位のブラジル社会で女性は、主人のみならず夫にも服従して生きることを強いられ、それだけに自分たちの独特な世界を作りあげて自分たちを守ったのだという。「おそらくは私たちのあいだで話し、聞くことが、私たちが持っていた唯一の防衛であり、唯一の救いだった」とエヴァリストは述べている (EVARISTO 2005)。エヴァリストの文学は、書物や文書などの文献を下敷きにはせず、先代から口伝で聞いた神話や物語や奴隷制度下の経験、そして自らの人生経験がベースにある。エスクレヴィヴェンシアは、奴隷としてアメリカ大陸に連れてこられた黒人、とりわけ黒人女性の過去から現在に至るまでの痛みと苦しみを、黒人(女性)のエピステーマーを土台に口頭伝承性に基づき語ることで生まれる。主要言語以外では文字を用いなかったアフリカでは、長期にわたって文字に頼らない情報伝達や文化の伝達が行われ、「声の文化」(オング 1991) が発達した。「声」は、昔話や歌は娯楽であると同時に、部族の価値体系や世界観を伝える手段でもある。そうやって先祖から伝えられたものを、エヴァリストは口頭伝承性を保ったまま、自身の文学で再現しようとしているのである⁸。このような文学についてエヴァリストは次のように述べる。

私にとって黒人女性のエピステーマーは、アフリカの人々の子孫としてのアメリカ大陸における我々の歴史的経験から生まれます。その経験が、無意識かもしれませんが、立ち位置や身の置き方、世界の解釈における差異を作るのです。私は文学を、そうした痕跡を扱う場だと考えています。研究者の中にはそれをトラウマの文学とする人もいます。トラウマの文学はよくユダヤ人作家の作品において考えられます。私はそのトラウマ文学を黒人作家の作品を起点にして考えることもできると思うのです。そのエピステーマーは、世界の位置取りの異なった方法であり、口頭伝承性を通して得た学びでもあります。その学びは学校で評価されないかもしれませんが、あるいはアカデミアでは評価されないかもしれませんが、口頭伝承性の学びのプロセスを経た人にはそれが持つ意味がよくわかります。私の最初の学びの場はまさにその口頭伝承、そして貧困から取り

出されたものなのです。(EVARISTO 2018a: 10)

口頭伝承性はまた、「『中』から繰り出される私の声は、別の語調を獲得すると私は信じている」というエヴァリストの言葉を前節で引用したように、独特な語調を醸し出す。

家での私たちはものすごくお喋りで、ものすごいストーリーテラーでした。私たちはものすごく茶化したり (debochados) 面白おかしく話します。転んで足を骨折した人がいた場合、だれも、ただ転んで足の骨を折ったとは言いません。その人が叫んだとか、骨が三つに折れたとか言うのです。わかるでしょうか。つまり何が起こっても物語になってしまうのです。愉快的話になってしまうのです。辛い話ですらそうです。言ってみればドリブルの術ですね。私は物語を聞きながら育ち、その中には奴隷制の話もあれば、貧困と困難の話もありました。(EVARISTO 2018a: 9)

どんな話でも、たとえ苦悩の悲話であっても、愉快的話にしてしまう。これも貧困という学びの場で獲得した文学のレジリエンスであろう。

以上の理由からエヴァリストの文学の文体は、書き言葉よりも話し言葉に近い。エヴァリストは、言葉を選ぶ際には、できるだけ話し言葉に近づけるように努めているといい、辞書は使っても、辞書の中で眠っている「言葉を目覚めさせ、テキストの中で動きを与えるため」だという (DUARTE/NUNES 2020: 37)。

この意味でもエヴァリストの文学は、従来の文学に対抗的である。エヴァリストは次のように述べている。

「私が指摘してきているのは、人々が求め、要求することを書き、読む権利です。だれにでもある権利です。言語の学識的規範に従わないで書く権利です」(EVARISTO 2011)

2. 4. 人間性の回復

16世紀から19世紀末まで続いた奴隷制度の禍根は大きい。1888年の廃止時には社会統合策がとられることはなく、元奴隷は支援や保護を一切受けずに社会に放り出されたため、黒人はいまでも社会の周縁で人種差別と社会格差を被っている。エヴァリストは、その意味で奴隷制度は未解決だと主張し、廃止後も「モノ」扱いされてきたことに抗議の声を上げ、「人間として肯定」されることを求める (EVARISTO 2015)。

その一つにステレオタイプからの脱却がある。エヴァリストは「エスクレヴィヴェンシア」を説明するために、次のような文を象徴的に用いる。

私たちのエスクレヴィヴェンシアは、大邸宅の人たちに子守唄を歌うためではなく、不当なその眠りを覚まさせるためのものです⁹。

この表現を使った背景には「黒い母 (Mãe preta)」のイメージがある。「黒い母」とは、かつて白人の主人の子の乳母として、授乳から性の手ほどきに至るまであらゆる仕事を強要された黒人女性奴隷のことだ。「母」が含まれていることから想像されるように、その語には優しさや情愛といった意味合いが付与され、ブラジルの文化や文学ではそのイメージが強く残っている。そしてその言葉を通して、人種デモクラシーを提唱したジルベルト・フレイレをはじめ、ブラジル社会における温情的な白人と黒人の関係が強調されることとなった¹⁰。黒人女性は、その延長で「受け身で自らの意思を持たない」とされてきたが、エヴァリストは、それは声を上げる自由を奪われ、意思を持たない状況に置かれ沈黙を強いられていたからに過ぎないと主張し、その「残酷な」ステレオタイプに抗議する (EVARISTO 2018a: 5)。白人の中には、乳母が黒人だったから自分には人種偏見がないという人が少なくないが、そうした発言は聞くたび憤りを感じるという、次のように述べている。

私はよく訊き返すのです。「だから？ だから何なの？ だから何なのですか？」黒人女性に育てられたという事実は何の意味もありません。そのイメージが不愉快なのです。アフリカの女性は奴隷にされ、その子孫は大邸宅の人たちを寝かせるために物語を語らせられたのです。そうした黒人女性が作家となって物語を書くのです。そうした女性たちのエスクレヴィヴェンシアこそがまさに大邸宅の人々の目を覚まさせるためのものなのです。そのエスクレヴィヴェンシアでこそ私は過去のイメージを消し去りたい。それは別のイメージなのです。奴隷にされたアフリカ人女性とその子孫は、家の中で自分の物語を語ることは絶対にできなかった、自分の生きざまを語れなかったのです。黒い母がどうやって主人の息子に言えますか？ 自分が殴られているとか、奴隷にされたとか、家族といっしょに住むことはできず、自分の子どもが飢えて死にかけているのにその子に乳をのませてやったなんて。そうした物語において女性たちは沈黙した。私たちのエスクレヴィヴェンシアは、それらの物語に陽の目を浴びせたいのです。(EVARISTO 2018a: 5)

エヴァリストには、黒人女性に身体も含め、新しい表象を与えたいという強い願いがある。

ステレオタイプに関してはエヴァリストも被害者だ。あるとき公文書保管係の女性と話した際、エヴァリストが作家だと知ったその人はすぐに、書いているのはレシピですか、と訊いたという (EVARISTO 2018b)。黒人といえば、できるのは歌とダンス、とくに女性は料理というのが一般社会に浸透しているイメージだ (EVARISTO 2018d)。その偏見は出版界でも強く、「イベントで挨拶もろくにしてくれない白人男性の作家は多く、ジャブチ賞を受賞してようやく認めてもらえるようになった」という (EVARISTO 2018b)。このような状況では自ずから「書くこと、出版することは政治行為」になる。物語を書き、語ることこそが、偏見に立ち向かい、白人 (男性) 社会から一方的に押しつけられたイメージや記憶を払拭する最善の方法なのだ (EVARISTO 2018b)。

男性優位主義社会であるブラジルでは、同じ黒人でも、男性に比べて女性のハンディは

大きい。だが、エヴァリスタは黒人フェミニズムという用語を使うことに慎重だ。黒人女性の境遇は白人女性と全く異なるのに、フェミニズムという言葉を用いると、白人のフェミニズムと類似した状況にあるように誤解されてしまうと、次のように主張する。

私たちの歴史は別物です。なぜなら (…) 黒人女性のフェミニズムは理論から生まれてはいないからです。実践から生まれるのです。中産階級の白人女性がフェミニズムの戦いを引き受ける時、彼女たちは理論や、私たちが発したこともない疑問を通して引き受けます。私たちの活動は街路、職場、実践においてなされます。(…) だからといって黒人男性が男性優位主義でないとは言いません。たしかにそうです。(…) でも私たちがまず闘う相手は黒人男性ではありません。それは国(少し間をおく)、白人のブルジョアの家父長制的な国家であり、そこで白人女性は何の困難を伴わずに命令を下す立場と権力を行使できるのです。(…) だから私は言うのです。私たちの行動様式と物事の捉え方はまったく異なっているのだと。(JESUS et al. 2018: 5)

白人女性が必要とするフェミニズムと黒人女性が要請するものはまったく異なり、白人のフェミニズムを黒人女性の実践を考えるためのパラメーターとしてはならないと言う。(JESUS et al. 2018: 5)

2. 5. 個から集団へ

エスクレヴィヴェンシアのもう一つ重要な点は、たとえ物語が個人の体験であっても、それが集団の経験や記憶まで高められていることだ。このことについてエヴァリスタは次のように言う。

エスクレヴィヴェンシアは、個人化された主体にまつわる書かれた物の枠を越えます。(…) エスクレヴィヴェンシアは、貧しい黒人女性を著者とする文学の実践として現われます。その動作主、すなわち行為の主体は、自分の行動や思想や考察を個別の実践としてのみならず、グループや集団性に貫かれたものとして受け入れるのです。(DUARTE/NUNES 2020: 38)

「貧しい黒人女性を著者とする文学の実践」を「グループや集団性に貫かれたもの」として受け入れられるのは、そこで語られていることが、同じ境遇の人間に実際に起きたことや、家族や先祖に共通して起こったこと、そして口頭伝承性に基づき口伝えで聞いていることだからだ。物語は共通の体験や記憶の断片で紡がれるため、読めば、おのずからその世界は自分の物語となり、そこには同じ過去を持つ者同士、同じ痛みや苦しみを抱える者同士の連帯感が生まれる。「口承文芸の記憶は、部族社会における自己のアイデンティティの証」(江口 1985: 72) にもなるから、口頭伝承性の力はここでも発揮される。

さらに物語は読者と共通の土俵、すなわちエピステーメーを持っている。従来の文学の

ように縁遠いヨーロッパの神話やカノンの文学伝統ではなく、日頃から耳にする神話や自分も信仰する神々がベースにある話は、自分の物語として読めるのだ。エヴァリストは、ヨーロッパのナルキッソスと、アフロブラジル宗教の川の女神オシュンと海の女神イエマンジャーを対比させ、独自の文学的枠組みについて次のように述べている。

エスクレヴィヴェンシアはナルキッソス的な物語ではないと断言します。なぜならそれは私自身について書かれた物ではない、私一人の物語に限定されたものではないからです。(…)「エスクレヴィヴェンシア」はナルキッソスが水で自分自身をみつめることが書かれた物ではない。だってナルキッソスの鏡に私たちの顔は映らないでしょう。(…)私たちの鏡はオシュンの鏡であり、イエマンジャーの鏡です。私たちは、アフリカの神話的な語りのアベベ（オシュンの持ち物である手鏡——筆者注）を取り入れることで、私たちのテキストをより深く理解し、私たちの理論的装置を打ち立てます。というのも私たちは、オシュンやイエマンジャーの鏡に視線を投げかけてこそ、自分たちの書かれた物の意味にたどり着けるからです。オシュンのアベベの中で私たちは美しい私たちを発見し、私たち自身の力と向き合います。(DUARTE/NUNES 2020: 38-39)

エヴァリストは、自作の中でアフリカ伝来の語彙や神話を使い、従来のステレオタイプ化された黒人とは異なる登場人物を設定し、これまでにはなかった形の機能や役割を黒人共同体に与えたいと述べている。(EVARISTO 2018a, DUARTE/NUNES 2020: 38-39)。

3. 『ポンシア・ヴィセンシオ』

ここからはエヴァリストの代表作の一つである『ポンシア・ヴィセンシオ』を通して、エスクレヴィヴェンシアが実際にどのように実現されているかを検証していこう。

3. 1. 『ポンシア・ヴィセンシオ』

3. 1. 1. あらすじ

『ポンシア・ヴィセンシオ』は、エヴァリストが2003年に初めて発表した長編小説だ。大都市のファヴェーラに住み、極度の虚脱状態 (vazio) にある主人公ポンシア・ヴィセンシオが、自分の居場所をみつけると同時に、奴隷の苦難を背負う先祖の歴史や元奴隷として社会の周縁に置かれている人々の苦しみを共有し、新たな未来を拓く決意をするまでの経緯が描かれる。

ポンシアは、豪農ヴィセンシオ家が所有する大農場がある村で生まれた。ヴィセンシオ家はかつて多くの奴隷を所有し、村人のほとんどがその子孫で、ポンシアに限らず全員が主人の姓である「ヴィセンシオ」を名乗り、村名もヴィセンシオだ。村は白人の土地と黒人の土地に分断され、村人はいまでも奴隷同然の境遇に置かれている。男は白人の土地で強

制労働をさせられ、黒人の土地にある自宅にはめったに帰ることができない。ポンシアの父は、過酷な労働の最中に畑で倒れ、帰らぬ人となったが、その死を母とポンシアは1か月も経つまで知らなかった。そんな暮らしに希望を持たず、ポンシアはよりよい生活を求めて、身一つで大都市に上京する。運よく住み込み女中の職を得て、勤勉に働き貯蓄をし、家族を呼び寄せるために小さな家を買う。だが、田舎に戻ってみると弟も母も自分を追って家を出た後だった。

田舎から戻って結婚したものの、7回の妊娠で一つの命も生きながらえなかった。結局は家族とは離散状態になり、行きついたのもファヴェーラで、都会の生活に夢破れて虚脱状態になってしまう。夫はそんな妻に暴力を振るった。

一方、姉の後を追って都会に出た弟ルアンジは、警察署の掃除夫の職に就くことができ、上司の黒人巡査ネストルに目をかけられる。巡査になる目途が立ったところで、一旦田舎に戻ったが、家は空き家になっていた。そこで村の霊的指導者のネングア・カインダを訪ね、自分の連絡先を置き、母や姉妹が来たら渡してくれるように伝言を残す。

ある日、ルアンジの上司の巡査ネストルが駅で勤務にあたっていると、気になる老婆を見かけた。話しかけてみると、ルアンジの母親で、母と息子は再会する。その後、ルアンジは念願の巡査になり、最初の勤務地として駅を命ぜられる。

同じ頃、鬱々と過ごしていたポンシアは突然手に痒みを覚え、それをきっかけに故郷を思い出し、村に帰ることを思い立ち、汽車に乗るために駅に向かう。そこで勤務中のルアンジに出会い、三人は再会を果たす。

3. 1. 2. 祖父の継承者としてのポンシア

以上の大まかな流れに、いくつかポンシアに関する情報を補足しておきたい。

ポンシアは子どもの頃から自分の名前に違和感を抱いていた。自分の名前が好きになれず、子どものときは川面に映る自分を眺め、自分の名前を呼んでみたが、まるで別人を呼んでいるようだった。大人になって都会に出た後もそれは変わらず、自分の中にぽっかりと穴が空いてしまった感覚を覚え、自分の「中にも外にも大きな裂け目ができて、その虚空が自分と混然一体となった」ように感じ、恐怖感すら抱いた。しかし次第にそれにも慣れ、むしろ「非在」を好むようになり、自分がわからなくなり、「自分自身が他人」にすらなってしまう (40) ¹¹。夫にも、もう「ポンシア・ヴィセンシオ」という名前では呼ばず、「無」と呼んでほしいと言うほどだ (19)。夫が暴力を振ったのも妻のそんな状態が原因だった。辛い労働で疲れて帰宅し、そんな妻の状態を見て苛立ちも頂点に達したのだった。

またポンシアは、幼少時から祖父ヴォ・ヴィセンシオを彷彿させるところがあり、その遺言の継承者だと言われていた。ヴォは肘から先の腕がなく、その腕を背後に回して歩く癖があった。祖父はポンシアがまだ赤子のときに死んだにも拘わらず、ポンシアは初めて立ったときから祖父そっくりの歩き方をし、周囲の人を驚かせた。歩き方だけでなく、祖父が口にして意味不明の言葉や泣き笑いの癖も憶えていた (15)。さらにはポンシアが得意な陶芸を生かして祖父そっくりの人形を作ったときには (20)、改めてみながポン

シアは祖父のヴォの継承者だと認めたのだった。

3. 2. 奴隷制の記憶としてのヴォ・ヴィセンシオ

では、その祖父ヴォとはどんな人物だったのか。

失った腕は、将来を悲観して、自ら切り落としたものだ。というのも農場ではどれだけ働いても、富むのは白人の農場主だけで、自分たちはいつまでも自由になれなかったからだ。奴隷制廃止時に土地は譲渡してもらえたが、それにはずっとその農場で働くことが条件で、「全員が、まるで神のような永遠の権力の軛の許に居続ける」(42) ことになった。そしてその土地も、元主人が譲渡証書を預かるという名目で取り上げたため、結局は奪われてしまった(53)。男が白人の土地で働かされているあいだ、女と子どもは黒人の土地で作物を作ったが、その大半が白人に上納させられた(30)。1871年に施行された出生自由法も実効性がなく、それ以降に生まれた奴隷の子は自由のはずだったが、子どもの3人か4人が主人によって売られていた(44)。残った息子は主人の子の小姓(pajem)にさせられ、息子の馬になったり、口を開けさせられ放尿されたり、理不尽な扱いを受けた(17)。

祖父ヴォは泣き笑いをするしかなかった。ついにある日、そんな状況に絶望し、孫に同じ思いをさせたくない、この不幸の連鎖を断ち切るため妻と心中を図ったのだった。だが妻を殺し、自らの腕を切り落としたところで、息子に助けられてしまった。農場主はそんな彼を売ろうとしたが、腕を失った狂人は売れず、その後は「残飯を食べ」、「犬の餌を拾い」、「みんなの拷問の苦しみを泣き笑いしながら見守り」、「あらゆる狂気の笑いを笑い尽くし、正気でない涙を泣き尽くして」死んでいった(44-45)。肘から下のない腕、それを背に回して歩く癖、泣き笑い、それらは祖父ヴォの苦難の象徴だ。

3. 3. 個から集団へ

ポンシアの極度の虚脱状態も、将来に対する絶望が原因だった。新天地を求め、夢と希望を抱いて都会に出てきたものの、差別と排除に遭い、社会の周縁に追いやられ、結局行きついたのはファヴェーラだった。奴隷の子孫という身分は、どこへ行っても軛のようにつきまとった。都会は明らかに自分の世界ではなかった。自分の世界はどこなのか、自分はだれなのか、痛いほどに自己喪失感を味わっていた。そして家族とのつながりも断たれ今、完全に居場所を見失っていた。

その虚無感の名前への違和感が継続していたことにも表われている。特に「ヴィセンシオ」という姓は「祖父の祖父の以前から」自分たちを奴隷として使った主人の名前であるだけに受け容れ難く、「署名をするたびに」「ヴィセンシオ大佐とやらの権威の記憶がよみがえった」。「時代は過ぎても土地と人間の所有者となった人の名残が残っていた」のだ(26-27)。ポンシアにとって「ヴィセンシオ」は「白人の優位性の象徴」(Arruda 2007: 46)だった。

さて、この祖父ヴォやポンシアの経験は、多くの人の経験や伝承となっている歴史的事実と共通するもので、二人に限ったものではない。奴隷制度下で黒人たちはさまざまな抵抗手段に出たが、自殺はその代表的な一つだった¹²、新境地を求めて都会をめざしたことも、多くの元奴隷やその子孫がたどった道だ。そして奴隷制度廃止後の解放奴隷は、元の農場で生活費の足しにもならない給金で働き続けるか、都会に出るか、季節労働者として農場から農場へと放浪するかしかなかった (GOMES 2022: 515-517)。ちなみに現代のリオやサンパウロ等大都市のファヴェーラはその結果で、まさにポンシアがたどり着いた場所がそれだ。

このようにポンシア一家の物語 (história) は、奴隷としてブラジルに連行された多くのアフリカの人々の歴史 (história) にも重ね合わされている。このことは逸話レベルでも見られ、母マリアが都会に向かったときの、脚も伸ばせないほどのぎゅう詰めの汽車 (99) は奴隷船を思い起こさせる (Arruda 2007: 57)。奴隷船は、アフリカからブラジルに奴隷として連行された人々のディアスポラのメタファーとして多くの文学作品に出てくるものだ (Arruda 2007: 38-44)。またこの小説で、ポンシアのみならず夫も弟ルアンジもその上司のネストル巡査も孤独に苛まされているが (93-94)、天涯孤独の境遇は、アフリカでの捕獲時やブラジルに到着後に一家離散を強いられた奴隷たちのだれもが置かれた状況だった。つまり祖父ヴォとポンシアの苦難は、奴隷を先祖に持つ人々すべての艱難困苦を代表するものなのだ。『ポンシア・ヴィセンシオ』にはブラジルに奴隷として連行されたアフリカの人々の悲しい歴史が仮託されている。

当初ポンシアは、自分が祖父の継承者と言われても、その意味が理解できず、村に戻ったときに霊的指導者のネングア・カインダから、その運命から逃れることはできないと言われても返事ができなかった (52-53)。その意味に気がついたのは、手に痒みを覚え、そこから漂う土の匂いを嗅いだときだった (64, 69)。同時に祖父ヴォの姿の泣き笑いの記憶が甦り、思わず祖父を象る泥人形に接吻をすると、「手に取れるような土への懐かしさ」がこみ上げ、「死者とのつながりを失っていない」ことが実感された。ポンシアが先祖とつながった瞬間だ。そしてすぐにそれは「母や弟にもきっと生きて会える」という確信につながり (65)、ポンシアの目は未来へ向けられた。祖父ヴォの時代は、元奴隷の境遇から逃れようと思ったら、死しか方法はなかったが、いまは違う。ポンシアは祖父ヴォから託された願いと期待に気づき、苦境を乗り越え、自分たちの世界を見つけようと思いついたのだ。

さてここで一旦、エスクレヴィヴェンシアとの関連を整理しておこう。エスクレヴィヴェンシアで重要なのは、貧しい黒人 (女性) のエピステーメーを持ち、口頭伝承性を通して人間性の回復がめざされ、かつ語られる経験や記憶が個人ばかりでなく集団のものとなることだった。『ポンシア・ヴィセンシオ』は全知の三人称の語り手による小説だが、語り手は描出話法を駆使し、貧しい黒人女性であるポンシアと母マリア、そして弟ルアンジに入り込み、それぞれの心のうちを「中から」語る。その内容は、著者エヴァリスト自身の経験や家族や周囲の人たちから伝え聞いた話だ。「エスクレヴィヴェンシア」には、「被従属性を身を以て経験した」り、「歴史的にそのような先祖を持つ」当事者が、実体験や口頭伝承性に基づく歴史的経験を「中からの声」で語り、それを集団のものにまで高めてい

ることが必要だったが、これらが『ポンシア・ヴィセンシオ』で実践されていることがわかるだろう。

次に黒人（女性）のエピステーメーとそれを通して物語の中でめざされていることについて見ていこう。

3. 4. 故地とアフリカの神々への回帰

3. 4. 1. 故郷の土への回帰

『ポンシア・ヴィセンシオ』には土 (terra) や泥 (barro, lama) が重要なキーワードとして出てくる。土は村ではたいへん身近な存在で、「床も鍋も装飾品もおたまもすべてが土製」(24) であるばかりでなく、母マリアは、「彼女と村の地面との血統を堅固に」するために村の大地にへその緒を埋めている (90)。ポンシアが自分の使命に気づいたのも土の匂いがきっかけで、それを機にポンシアは村へ帰る決意をする。土は、ポンシアが居場所として再認識し回帰していく場所でもあるのだ。それに気づいたとき、ポンシアは、「円を描いて歩く」という不思議な行動 (110) に出ているが、それは「回帰」と「完結」を意味していると考えられる。

土はまた、彼らのルーツであるアフリカの文化に照らしても特別な意味を持つ。ヨルバの創世神話では、人間は土から創られ、至高神であるオロドゥマレによって命が与えられたとされている¹³。この神話をふまえれば、ポンシアが土で祖父ヴォの人形を作ったことには、単なる陶芸以上の意味があるだろう。祖父ヴォの意思を継承し、新たなブラジルの黒人の未来を切り拓く創始者としてポンシアに与えられた使命が見てとれる。

3. 4. 2. アフリカの神々への回帰

『ポンシア・ヴィセンシオ』にはヨルバの神々への直接の言及はないが、いくつかの神々オリシャが念頭に置かれていることは、複数の研究者が指摘している¹⁴。とりわけ関係が深いのがオシュン (Oxum) とナナン (Nanã) とオシュマレ (Oxumarê) だ。

オシュンは、川や湖や泉の水で病気を治す川の女神で、美と善意とやさしさを表わす母として、女性の偉大な力と豊穰性を発揮して子どもを守る。戦う女として、決然とした態度で目標を追求し、あらゆる次元の愛の力を持つために、否定的な力を呑み込み、物事を生み出す力となる (DIAS 2006: 36)。ナナンは、沼や泥地に住む水の女神で、人間創造の素である泥をつかさどり¹⁵、正義を守る貧しい人々の守護神でもある (DIAS 2006: 39)。またアメリカ大陸では神霊界で最年長の神であり、先祖から伝えられた知の守り神ともされる (PRANDI 2001: 21)。オシュマレは動きや変化をつかさどる虹のように美しい神で、両性具有的な性質を持ち、水にも大地にも属し、対立する二つの力の統合を表わす。絶え間ない有為転変に敢然と立ち向かい、障害を乗り越え、生命のサイクルを完結させる力を持つ (DIAS 2006: 34)。

エヴァリストはあるインタビューで、ある日、リオの空に虹がかかったのを見たときに虹色の蛇で表象されるオシュマレを思い出し、子ども時代に親しんだアフリカ伝来のイメージが自分の中に残っていることを発見したと述べている。そして『ポンシア・ヴィセンシオ』をすでに書き終えていた時点で『ブラジル・バントゥ辞典』にヨルバのオシュマレに相当するバントゥの神格のアンゴロをみつけ、小説の最後でそれを虹に代えて使ったことも明かしている。(EVARISTO 2014: 110-111) アンゴロは最後ばかりでなく、小説の冒頭にも出てくる。オリシャの特徴をふまえてその箇所を読むと、背後にオリシャの存在があることが読み取れる。

ポンシア・ヴィセンシオが空に虹を見たとき、震えがきた。子ども時代にずっと感じていた恐怖を思い出したのだ。虹の下を歩くと少女は少年になると人は言った。泥をとり川にいったとき、そこで空の蛇が水を飲んでいて、どうやって向こう岸に渡ろうか？ときどき何時間も川岸で、空中の色鮮やかな蛇が消えるのを待った。なのにぜんぜん！虹はしぶとかった。じりじりと心配になった。母親が自分を待っていることがわかっていて、そこでスカートと脚の間に挟んで性器を隠し、心臓をときどきさせながら、跳んでアンゴロの下をくぐった。それから全身に触れてみた。膨らみはじめた小さな胸もある。まっ平らな恥骨もある、出っ張りはまったくない、あるのは毛だけ。すばやく一飛びで飛び越えた。虹をだますことに成功し、少年にはならなかった。(13)

「アンゴロ」や性転換に言及されていることから、オシュマレの存在が暗示されていることがわかる。ちなみに虹の下を通ると性別が変わるといふ云われも、やはり子どものころに聞いたものだという。(EVARISTO 2014: 110) 虹がオシュマレならば、川にもオシュンが暗示されていると解釈するのが自然であろう。この小説は川で始まり、ポンシアが村の川に帰るところで終わる。母マリアは、川はポンシアにとって「母なる水」(107)と表現していることから、川の神オシュンはポンシアの守り神であることが想像される。「否定的な力を呑み込み」「戦う女」神であるオシュンは、元奴隷たちの苦難を一手に引き受け、彼らの人間性を回復し、新しい未来を切り拓くために戦う決意をするポンシアにふさわしい。ポンシアは川の女神オシュンの申し子なのだ。

またナナンがつかさどる泥は、先述したように、この小説の重要なキーワードだ。土と水が合わさった泥で祖父ヴォの人形を作り、先祖の遺言を継承するポンシアの姿は、「沼や泥地に住み、正義を守る貧しい人々の守護神」として、先祖から伝えられた知を守るナナンに重なる。以下は、小説の最後にポンシアが弟と母と再会し、祖父ヴォの遺産を受け容れたときの情景だが、ここにも、オリシャの見守りの下で、先祖の記憶の絆と遺言を受け入れ、立ち上がるポンシアの姿がうかがえる。

外では、虹色の空に、多様な色をした巨大なアンゴロがゆっくりと融けていき、他方でポンシア・ヴィセンシオは、自分の仲間によって再発見された記憶の絆と遺言となり、今後は決して自分を見失わず、川の水に守られていくのだった。(111)

川の神オシュンと泥の神ナナンばかりでなく、オシュマレ（アンゴロ）の「絶え間ない有為転変に敢然と立ち向かい、障害を乗り越え、生命のサイクルを完結させる力」も授かって、ポンシアは新しい未来へ向けて歩みはじめたのだ。

3. 4. 3. 基底にある宗教的世界観

ところでこの小説は、最後に全員が畳みかけるような再会を果たし、その突然の大団円はなにやら唐突な印象すら与える。だが、アフロブラジル宗教観をふまえると、一転して自然な展開になる。なぜならすべては靈的指導者のネングア・カインダの予言どおりに事が動いているからだ¹⁶。ポンシアも弟ルアンジも母マリアも、村に戻ったときにはカインダに会い、助言や予告を受けている。再会できたのもルアンジが自分の住所をカインダの許に預け（82-83）、それを母親が受け取ったからだった。母親は、カインダから「すべてに正しい時がある」と、物事には潮時があることを教えられ（66）、「子どもを迎えに行く潮時」もその言葉から読み取っている（91）。つまり三人の再会は偶然ではなく、カインダの靈的采配によって起こされたことになる。西洋近代の発想では稚拙にも映りかねないこの急展開は、アフロブラジル宗教観と世界観に馴染みのある読者から見ると、神々の御業としてごく自然に受け入れることのできる終幕なのだ。

ところでオシュマレの両性具有性との関連についてはどう考えたらよいだろうか。ポンシアは少女のころは女でいることが好きだったが（24）、家父長制社会の中で夫に従い、暴力まで振るわれるうちに、その気持ちも薄らいでいった。その一方で働き詰めの夫を見て、「彼も幸せではないのではないか」とも考えはじめる。祖父ヴォや弟が白人の土地で働かされ、遊ぶ時間もなかったことを思い起こすと、「少なくとも自分が知った男たちにとって、人生は女と同じくらいに辛いのではないか」とポンシアには思えてきた（48）。このようにこの小説では男性と女性の対立構造がない。オシュマレの両性具有性はその暗示なのではないだろうか。ポンシアが虹の下をくぐっても、男性にならなかった逸話が挿入されている理由は、そう考えると納得がいく。

では、ポンシアが生んだ7人の子の全員が生き延びなかったことはどう考えたらよいだろうか。一見、それは女でいることの拒否と受け取れなくもないが、産む性としての生物学的な役割のみを求められることへの拒否か、代々連鎖する苦難の断絶を表わしているとも考えられるだろう。

3. 5. アフロブラジルの世界

ここで一つ確認しておかなくてはならないことがある。それはポンシアたちが回帰したのが「純粋な」アフリカではないことだ。たしかにポンシアたちはアフリカの神オリシャに導かれ、カインダの靈的導きを受けて再会を果たした。だが、回帰していった場所は、母マリアが血統を堅固なものにするためにへその緒を埋めた黒人の大地であって、アフリ

カではない。おそらくここには、この黒人の土地こそ自分たちの土地だという政治的権利の主張も含まれているだろう。

そして文化もやはり「純粹に」アフリカのものではない。たとえばポンシアが都会に着いて初めて街頭で独り夜を明かしたとき、恐怖のあまり捧げたのは聖母マリアへのロザリオの祈りだった (32, 33, 35)。彼らの宗教は、純粹にアフリカのものではなく、アフリカの宗教とカトリックが混じり合ったアフロブラジル宗教なのだ。これはポンシアの誕生にも表われている。ポンシアを身ごもった母マリアは、妊娠7か月目のある朝、お腹の子ども泣き声で目を覚ました。耳を澄ますと、泣き声はお腹の中から聴こえ、まるで「この世の終わりを知り尽くしたよう」な泣き声だったため、直観的に川に向かい、身を水に沈めた。すると泣き声はその後3日を経て、次第に鎮まっていった。この出来事を母親は、ポンシアが「自分の腹を借りて」生まれてきた「しるし」だと受け取り、その後、ポンシアは、月が4度満ちたときに「か細く深い笑いを大声で笑いながら」生まれきた (107-108)。川の女神オシュンの加護を受けながらも、母マリアの「腹を借りて」生まれてきた経緯は、まるでイエス・キリストの誕生を思わせる。オシュンは、カンドンブレではカトリックの懐胎 (無原罪) の聖母マリアと習合されている¹⁷。ポンシアは、ブラジルの元奴隷たちの救世主としてオシュンと聖母マリアを介して遣わされた子なのではないか。そう考えるとポンシアの母親の名の「マリア」の意味も生きてくる。『ポンシア・ヴィセンシオ』の物語世界は、アフリカの宗教とキリスト教が習合したアフロブラジル宗教に基づいている。

おわりに

以上のように『ポンシア・ヴィセンシオ』の知的枠組みは、アフロブラジル宗教的世界観や象徴体系に基づいており、それに慣れ親しんでいる人にはわかるが、なにも知らない人にはわからない。まさにヨーロッパ伝来の世界観や象徴体系に親しんでいないアフリカ系の人々がヨーロッパ中心主義のブラジル文学に馴染めないのと同じ (逆の) ことが『ポンシア・ヴィセンシオ』では起きている。またこの小説の主人公は、差別と排除に果敢に挑戦し、黒人の未来の転換を図る強い女性であり、受け身の女性としてのステレオタイプは覆されている。さらに興味深いことに、この小説には人格の備わった白人が一人も登場しない、娼婦ビリーザを背後で操るパトロンや女中の部屋に息子が入るのを黙認する奥方 (セニョーラ) の存在が漠と感じられるだけで、彼らはまるで背後霊のように権力の象徴として漂うだけだ¹⁸。これは白人偏重のブラジル文学に対する挑戦として受け止めることができる¹⁹。まさにこれがエスクレヴィヴェンシアなのだろう。

ところでエヴァリストが、アフロブラジル文学のパイオニアであること、そしてこの作品が最初の長編小説として出版されたことを考えると、奴隷の苦難の記憶を引き受け、自らのルーツに回帰し新しい歴史を創るべく歩み出したポンシアは、白人中心のブラジル文学を自分たちの手に引き寄せ、新しいアフロブラジル文学を創るエヴァリストの姿と重なる。この小説こそが、ポンシアが泥をこねて創った人形なのかもしれない。まさにコンセイサオン (=懐胎 [の聖母のマリア])・エヴァリストの名にふさわしい小説だ。

註

- 1 20年にはイタマル・ヴィエイラ・ジュニオールが『曲がった鋤』（長編小説部門）、21年にはジェフェルソン・テノーリオの『皮膚の内側』（長編小説部門）、22年にはエリアーナ・アウヴィス・クルスの『ドレス』（短編小説部門）が受賞している。
- 2 『記憶の路地』はファヴェーラの住民のドラマを描いた小説、『思い出とそのほかの動き』は、アフリカ系の人々が置かれている不当な境遇を訴える詩集、『女性たちの不屈の涙』は人種的にも性的にも搾取される黒人女性たちの苦悩を描いた短編集、『涙の眼』はアフリカ系ブラジル人の社会的疎外を扱った短編集である。
- 3 2016年にグローボ新聞社による文学賞「ファイス・ジフェレンサ（Faz Diferença）」賞を受賞し、翌年の2017年にはパラチで毎年行われる国際文学祭（Festival de Literatura Internacional de Paraty – 以下 FLIP）のメインゲストとして招待されたほか、ブラジルの代表的な文化機関であるイタウ・クウトウラウでもプロジェクト「オクパサオン」で大規模な展覧会が行なわれ、黒人初となるミナスジェライス州政府文学賞と、多大な社会的影響を与えた女性に与えられるクラウジア賞（文化部門）を受賞した。2018年には、2017年の際立った活躍に与えられるブラーヴォ賞と、周辺地域に関して目覚ましい発信を行なった人に与えられるメストリ・ジ・ペリフェリーア（周縁の師）賞を受賞し、2019年に、ジャブチ賞の「今年の文人」に選ばれている。（EVARISTO 2017）
- 4 本節にあるエヴァリストの生い立ちについては主に EVARISTO 2009 を参照した。それ以外の出典から情報については適宜記載した。
- 5 邦訳『カロリーナの日記』（浜口乃二雄訳、河出書房新社、1962年）。
- 6 「メダルをもらう人、留年せず、〔文化〕祭では歌と踊りを披露して聖母マリアを合唱する子どもたち」（EVARISTO 2009）
- 7 基本的に EVARISTO (2018a)、EVARISTO (2018d) を参照した。出典がそれ以外の場合は、（ ）でそれを記した。
- 8 「書くことは、話しを、声と音の世界から新しい感覚の世界、つまり視覚の世界へと移動させることによって、話しと思考をともに変化させる」（オング 1991, p. 178）とあるように、書くことが意識の構造そのものを変えてしまうことを考えると、博士号を取得するまでに「文字の文化」を身に着けたエヴァリストの文学における「声の文化」と「文字の文化」のせめぎあいについては、本論では踏み込めないが、それだけを本題とする深い分析と検証が改めて必要であろう。
- 9 この文は無数の文献やサイトで引用されている。たとえば EVARISTO 2020:30、EVARISTO 2018a。
- 10 フレイレは「ムカーマ〔乳母：筆者注〕の愛撫の中に、おそらく白人の及ばないほど大きな親愛の情や、ヨーロッパ人が経験するのとは比べものにならないやさしさ、そしてブラジル人の感性、想像力、宗教性を豊かにした熱く官能関な神秘体験も感じ取った」と書いている（フレイレ 2005: 150-106）
- 11 EVARISTO 2017, p. 40. 以下、本書からの引用は（ ）内にページを記して示す。
- 12 抵抗としての自殺はさまざまな文献に記されているが、アンチオーブ 2001 ではイギリス植民地を例として、自殺、農園からの逃亡、本土への逃亡、反乱の四つを奴隷制度から逃れる方法として挙げている。（アンチオーブ 2001, p. 196）ブラジルでもたとえば GOMES は、17世紀末に奴隷の自殺が多発した原因として、イエズス会士 Jorge Benci が主人の暴虐からの逃避を挙げていることを引用している。（GOMES 2019: p. 308）
- 13 この神話は多くの文献や WEB サイトで紹介されているが、その一つとしてルギラ 2004, p. 38 を挙げておく。
- 14 Arruda 2007, p. 79 のほか、OLIVEIRA/DEPLAGNE 2015、BALDO 2017、DUARTE 2019 など多数で論じられている。
- 15 人間が創られた泥をつかさどるという記述は PRANDI 2001:21 にもある。オシュンもナナンも水と関係しているが、オシュンの場所が川や滝であるのに対し、ナナンは湖の湖やぬかるみや泥や沼地の静かな水のある場所だという。（"Mulheres de luta", Nanã Barukê, a senhora da sabedoria, 21 de março de 2021. <https://www.mulheresdeluta.com.br/nana-baruke-a-senhora-da-sabedoria/>）
- 16 カインダは、アフリカの宗教にみられる霊的指導者のような人物で、祭祀、治癒し、占い師、予見者、長老など共同体の人々の霊的精神面を安定させる特別な役割を担う存在（ルギラ 2004: 20）だと考えられる。
- 17 このほか聖燭祭（イエスの誕生後 40 日目にエルサレムの神殿に行ったことを記念）の聖母マリアやアパレシーダの聖母マリア（ブラジルのパライーバ・ド・スウ川で奇跡を起こしたマリア）にも重ね合わされている。（Siva 2005: 94）
- 18 エヴァリストは、自身の作品には白人の登場人物が少なく、出てくるときは常に代表として権力の場で構築されていることにインタビューで言及した際に、『ポンシア・ヴィセンシア』を例に挙げている。（EVARISTO 2020: 28）
- 19 ブラジル現代文学の白人偏重については DALCASTAGNÈ,(2014), pp. 309-337 に詳しい調査がある。武田 (2022) にこの概要がまとめられている。

参考文献

文献

- ARRUDA, Aline Alves (2007), *Ponciá Vicêncio, de Conceição Evaristo: um Bildungstroman feminino e negro*, Dissertação de Mestrado apresentada ao Programa de Pós-Graduação em Letras: Estudos Literários da Faculdade de Letras da Universidade Federal de Minas Gerais, Belo Horizonte: Universidade Federal de Minas Gerais. <https://repositorio.ufmg.br/handle/1843/ECAP-76RF2H> 閲覧日 2020/8/14
- BALDO, Heloisa Gaiardo (2017), “Memórias da escravidão e ancestralidade em *Ponciá Vicêncio* de Conceição Evaristo”. 2017. 1 CD-ROM. Trabalho de conclusão de curso (bacharelado - Letras) - Universidade Estadual Paulista Júlio de Mesquita Filho, Faculdade de Ciências e Letras (Campus de Araraquara), 2017. <https://repositorio.unesp.br/items/ab26eab1-f7f9-45e0-9e43-bfeb8bf6223f> 閲覧日 2020/10/7
- DALCASTAGNÈ, Regina (2014) , “A personagem negra na literatura brasileira contemporânea” in *Literatura e afrodescendência no Brasil: Antologia crítica Vol.4: antologia crítica*, Belo Horizonte: Editora UFMG, 2014.
- DIAS, Rosana de Queiroz (2006), *Os orixás em nossas vidas-conversando com o Babalorixá Meceracy Pinheiro Ferreira*, São Paulo: Editora Adonis.
- DUARTE, Constância Lima, NUNES, Isabella Rosado (Org.)(2020). *Escrevivência: a escrita de nós : reflexões sobre a obra de Conceição Evaristo*, Rio de Janeiro : Mina Comunicação e Arte. <https://www.itausocial.org.br/wp-content/uploads/2021/04/Escrevivencia-A-Escrita-de-Nos-Conceicao-Evaristo.pdf> 閲覧日 2021/12/29
- DUARTE, Eduardo de Assis/FONSECA, Maria Nazareth Soares (Org.) (2014). *Literatura e afrodescendência no Brasil Antologia crítica vol 4 : antologia crítica*, Belo Horizonte: Editora UFMG.
- DUARTE, Roberta de Araújo Lantyer (2019), “O entre-lugar de Ponciá Vicêncio: O vazio como resistência”, Revista PHILIA, Filosofia, Literatura & Arte vol. 1, No 1, fevereiro de 2019. ISSN 2596-1911. <https://philpapers.org/rec/DUAOED-3> 閲覧日 2020/9/13
- EVARISTO, Conceição (2019), *Ponciá Vicêncio* 3ª ed., Rio de Janeiro: Pallas.
- GOMES, Laurentino (2019), *Escravidão vol. I: Do primeiro leilão de cativos em Portugal até a morte de Zumbi dos Palmares*, Rio de Janeiro: Globo Livros.
- GOMES, Laurentino (2022), *Escravidão vol. III: Da Independência do Brasil à Lei Áurea*, Rio de Janeiro: Globo Livros.
- OLIVEIRA, Ana Ximense Gomes de/ DEPLAGNE, Luciana Eleonora de Freitas Calado (2015), “A fertilidade ancestral em *Ponciá Vicêncio*”, boletim de pesquisa nelic, Florianópolis, v. 15, n. 23, pp. 179-198. <https://periodicos.ufsc.br/index.php/nelic/article/view/1984-784X.2015v15n23p179> 閲覧日 2020/8/9
- PRANGI, Reginaldo (2001), *Mitologia dos Orixás*, São Paulo: Companhia das Letras.
- SILVA, Vagner Gonçalves da (2005), *Candomblé e umbanda: caminho da devoção brasileira*. São Paulo: Selo Negro.
- アンチオーブ、ガブリエル (2001) , 『ニグロ、ダンス、抵抗——17～19世紀カリブ海地域奴隷制史』(石塚道子訳)、人文書院。
- 江口一久 (1985) , 「アフリカの口承文芸」、『アフリカ研究』27 1985.12
- オング、ウォルター J. (1991) , 『声の文化と文字の文化』(林正寛ほか訳)、藤原書店。
- フレイレ、ジルベルト (2005) , 『大邸宅と奴隷小屋 下』(鈴木茂訳)、日本経済評論社。

ルギラ、A. M. (2004) ,『アフリカの宗教』(嶋田義仁訳)、青土社.

インタビュー記事

- EVARISTO, Conceição (2005), “Da grafia-desenho de minha mãe, um dos lugares de nascimento de minha escrita”, Mesa de Escritoras Afro-brasileiras, no XI Seminário Nacional Mulher e Literatura/II Seminário Internacional Mulher e Literatura, Rio de Janeiro, 2005. Publicado no livro *Representações Performativas Brasileiras: teorias, práticas e suas interfaces*. Marcos Antônio Alexandre(org.), Belo Horizonte, Mazza Edições, 2007. pp. 16-21. <http://revistazcultural.pacc.ufrj.br/da-grafia-desenho-de-minha-mae-um-dos-lugares-de-nascimento-de-minha-escrita/> 閲覧日 2022/1/8
- EVARISTO, Conceição (2009), Depoimento concedido durante o I Colóquio de Escritoras mineiras, realizado em maio de 2009, na Faculdade de Letras da UFMG. <http://www.letras.ufmg.br/literafro/autoras/188-conceicao-evaristo> 閲覧日 2021/12/29
- EVARISTO, Conceição (2011) , Conceição Evaristo: literatura e consciência negra. *Blogueiras Feministas*, 2011. Entrevista de Conceição Evaristo concedida a Bárbara Araújo em 30 de setembro de 2010. <https://blogueirasfeministas.com/2011/11/22/conceicao-evaristo/> 閲覧日 2023/08/23
- EVARISTO, Conceição (2014) , “Conceição Evaristo”, in *Literatura e afrodescendência no Brasil Antologia crítica vol 4 História, Teoria, Polêmica*, Belo Horizonte: Editora UFMG, 00. 103-116.
- EVARISTO, Conceição (2015), “Entrevista com Conceição Evaristo”, Biblioteca Nacional, 26 de novembro de 2015. <https://antigo.bn.gov.br/acontece/noticias/2015/11/entrevista-com-conceicao-evaristo> 閲覧日 2020/8/10
- EVARISTO, Conceição (2017), Conceição Evaristo: imortalidade além de um título por Ivana Dorali, revista *Periferia*, julho/2017. <https://revistaperiferias.org/materia/conceicao-evaristo-imortalidade-alem-de-um-titulo/> 閲覧日 2021/12/29
- EVARISTO, Conceição (2018a), “Conceição Evaristo ‘Escrevivência: escrever, viver e se ver’ - entrevista a Márcia Maria Cruz”, in “Suplemento Literário de Minas Gerais, Belo Horizonte, Maio/Junho de 2018, Edição no.1378, pp. 4-11. https://issuu.com/suplementoliterariodeminasgerais/docs/sl_1378 閲覧日 2021/12/30
- EVARISTO, Conceição (2018b). Conceição Evaristo: ‘A literatura está nas mãos de homens brancos’, por Nahima Maciel, *Correio Braziliense*, 15 de julho de 2018. https://www.correio braziliense.com.br/app/noticia/diversao-e-arte/2018/07/15/interna_diversao_arte,694873/entrevista-conceicao-evaristo.shtml 閲覧日 2020/12/10
- EVARISTO, Conceição (2018c), “É preciso questionar as regras que me fizeram ser reconhecida apenas aos 71 anos, diz escritora”, 9 de março de 2018, Júlia Dias Carneiro, da BBC Brasil no Rio de Janeiro. <https://www.bbc.com/portuguese/brasil-43324948> 閲覧日 2020/8/10
- EVARISTO, Conceição (2018d), “Conceição Evaristo: “Não leiam só minha biografia. Leiam meus textos”, por Juca Guimarães, *Brasil de Fato*, 20 de novembro de 2018. <https://www.brasildefato.com.br/2018/11/20/conceicao-evaristo-nao-leiam-so-minha-biografia-leiam-meus-textos> 閲覧日 2021/12/30
- EVARISTO, Conceição (2021a), “Se avançamos, foi dando murro em ponta de faca”, *Teoria e debate*, Partido dos Trabalhadores, 2021/11/12 <https://teoriaedebate.org.br/2021/11/12/se-avancamos-foi-dando-murro-em-ponta-de-faca/>

閲覧日 2021/12/30

EVARISTO, Conceição (2021b), Entrevista com Conceição Evaristo “Racismo na grande literatura”, *Correio do Povo*, 2021/4/12. <https://www.correiodopovo.com.br/blogs/juremirmachado/entrevista-com-concei%C3%A7%C3%A3o-evaristo-1.601898> 閲覧日 2021/12/30

JESUS, Jessica F. Oliveira de /CASSILHAS, Fabrício Henrique Meneghelli/SANTOS, Silvana Martins Dos (2018), “Literatura negra, feminismo negro e tradução: uma entrevista com Conceição Evaristo”, in *Revista Estudos Feministas*, v. 26 n. 3 <https://periodicos.ufsc.br/index.php/ref/article/view/57055> 閲覧日 2020/8/8

WEB サイト・記事

Jabuti, “Confira os 5 finalistas de todas as categorias do 61º Prêmio Jabuti”, <https://www.premiojabuti.com.br/noticias/confira-os-5-finalistas-de-todas-as-categorias-do-61-premio-jabuti/> 閲覧日 2023/12/12

literafro - o portal da literatura afro-brasileira. “Conceição Evaristo”, Última atualização: 07 de Abril 2020. <http://www.lettras.ufmg.br/literafro/autoras/188-conceicao-evaristo> 閲覧日 2020/5/5

“Mulheres de luta”, Nanã Barukê, a senhora da sabedoria, 21 de março de 2021. <https://www.mulheresdeluta.com.br/nana-baruke-a-senhora-da-sabedoria/> 閲覧日 2023/08/27

“‘Não quero ser exceção’, diz a escritora Conceição Evaristo”, “faz DIFERENÇA”, *O Globo*, 29/03/2017 <https://blogs.oglobo.globo.com/faz-diferenca/post/nao-querer-ser-excecao-diz-escritora-conceicao-evaristo.html> 閲覧日 2021/12/29

“Prêmio ‘Mestre das Periferias’ Reconhece Marielle, Conceição Evaristo, Nêgo Bispo e Ailton Krenak, *RioOnWatch*, 17/08/2018. <https://rioonwatch.org.br/?p=35610> 閲覧日 2021/12/29

Conceição Evaristo’s Literature: “Escrevivência” and *Ponciá Vicêncio*

Chika TAKEDA

Summary

This article first discusses “escrevivência,” the unique writing style of Afro-Brazilian writer Conceição Evaristo, through several interviews held with her, and then verifies its application in her masterpiece, *Ponciá Vicêncio*.

Escrevivência aims to restore the humanity of black people, especially women, oppressed in all aspects of race, gender and class by subjectively narrating their unfortunate historical experiences and the pain and anguish they consequently still suffer from their own perspectives. The orality, Afro-cultural context of the story, and elevation of the protagonists’ individual experiences in collective memory are also relevant characteristics of this distinctive style. By combining these elements in a literary work, writers with African roots can break with the dominant Eurocentric literary tradition and create a unique literature that manifests their worldview and values.

The article concludes that escrevivência is fulfilled in the novel through the narration of several experiences and memories: the eponymous protagonist’s suffering caused by discrimination and exclusion in the city, chronicled from her own perspective as socially vulnerable; the tragic memory of slavery of her grandfather, Vô Vicêncio; and the reaffirmation of her own roots with the help of the orixás, the gods of Afro-Brazilian religion. Escrevivência is also accomplished in the novel as the work elevates Ponciá and her grandfather’s experiences as collective, such that the novel completes a narrative world that can be only understood and sympathized with by Brazilians with African roots.

キーワード

ブラジル文学 黒人文学 アフロブラジル 人種差別

Key Words

Brazilian literature black literature Afro-Brazilian racism